

「情報の世紀」のモノづくり考（14）

ある技術者の死

和田龍児

突然逝ってしまった有為の技術者のこと

今から2年前のことになるが、茨城県土浦市の葬場で1人の技術者の葬儀がひっそりと執り行われた。その技術者とは、通産省工業技術院機械技術研究所（現独立法人産業技術総合研究所）の機械技術部長であった龍江義孝さんである。

この葬儀には、氏ゆかりの仲間の多くが参列し、ありし日の氏の思い出を胸の中で反芻し、早すぎたその死を悼みながら惜別した。

筆者は、彼の突然の逝去の報に接したとき、「まさか」と仰天した。というのも、その日のほんの数週間前に氏に会ったばかりだったからだ。もっとも、こころなしかやせており、いつもの元気印といおうか、かつての談論風発の面影はなかったことは気にかかっていた。

彼は、筆者の古巣である工作機械業界の内部事情を、誰よりも一番よく熟知していた第一人者といってもよい人物である。これからは、なにかと難しい局面が予想される21世紀の日本の製造業の革新に、志を持って取り組もうとしていた矢先の出来事でもあった。

ここでいう志とは、技術についての熱い思いであり、情熱である。もちろん、彼の志の基本には、利他の精神があった。だから筆者は、彼の志の中に崇高・高邁な精神を感じたものだった。言葉を重ねれば、偏狭な愛社精神などとは、無縁なものである。

今日の製造業には、産学官のよりいっそうの協力が求められている。しかしながら、産学官それぞれの分野の事情に精通し、それを理路整然と調整できる経験豊かな官側の適任者は、残念ながらそれほど多くはない。学識・見識・経験はもちろんのこと、独自の幅広いヒューマン・ネットワークやインフォーマルなサポートグループと連絡がとりあえる、彼の活躍やリエゾン・エンジニアとしての彼の役割に、われわれ業界OBも大いに期待していた矢先の突然の死であった。

こうした意味で、彼を失ったことは、たん工作機械業界のみではなく、日本の産業界にとっても、たいへんに大きな損失であり痛恨事であったといってもよい。

骨があり、志のある技術者は今……

筆者は、以前工作機械メーカーに在籍していた関係から、龍江義孝氏にはずいぶんと厚誼を頂戴し、指導もいただいていたが、いつのころから親しく話をしたり、付き合うようになったか定かではない。

思い起こすに、彼との出会いは、たぶん日本工作機械工業会の副会長だった杉山一男さんや元技術部長の大高義穂さんやかつて業界のご意見番として知られた故隅山良次氏とともに、大学の工作機械関連の若い先生方のグループといっしょになって繰り出した、酒席かなにかではなかったろうかと考えている。

当時、官側にいた彼は、産業界との対話を重視

していた。筆者は、大型プロジェクトの「レーザ応用複合生産システム」の開発業務に携わるようになってからは、いっそう親しく話をするようになり、時には激しい議論を闘わせたこともあった。

彼はものごとを理路整然と語る論理の人であり、工作機械屋に多い帰納的論理をしがちなわれわれとは肌合いを異にした貴重な人材であった。ここでいう帰納的論理とは、よくいえば現実主義ということになるろうか、悪くいえば自社利益第一の論理をふりかざし、ご都合主義、妥協主義の立場に立ってものごとを考えることである。こうした立場のちがいは、恰好の議論のネタにもなった。

一方の彼は、いつも工業技術院機械技術研究所という官側の看板を背負う立場から、国家の果たす役割についての演繹的な論理展開を得意としていた。彼の主張はまさに正論中の正論であり、われわれはグーの根も出ない状況に追い込まれた。そうした時、彼は「そうはいつでも、世の中は理想通りにはいかないよネ。まあ、一杯やって頭を冷やしましょうや」と、赤提灯の世界へ誘うのが常だった。このあたりの機微のバランスも絶妙だった。

立場を異にするとはいえ、筆者は内心では、彼の論理構成の正しさや先見性には大いに敬服し、畏敬の念をもっていた。彼の主張が実現するのを心密かに願っていた者は、筆者一人だけではなかったろう。

彼のように骨があり、志のある技術者が、あらゆる分野で少なくなってきたのは、誠に寂しい限りである。

本当に格好よい技術者とはどのようなものか

ところで龍江さんにせよ、故隅山良次さんにしろ、けっして今風の格好のよい技術者とはいいい難

いかもされない。しかし、彼らは誠実な人柄の中に、自己の哲学や凜とした気迫や気概を持っていた。そして、なによりも人間臭の横溢した存在でもあった。

そして、彼らに共通していえることは、工作機械に対する燃えるような情熱と、技術に対する矜持である。それは、ものづくりに対する自信に満ちた哲学といってもよいだろう。

これは、われわれも若い技術者たちも、彼らから学ばなければならないことである。そして、もう一つの手本は、けっして企業での職位の高さを鼻にかけたり、役人風を吹かせたりはしないことだった。いつも、相手との目線の高さをそろえ、技術論そのものを議論していたことで、彼らのまわりには人材が集まった。

「人間く出世したかくしないか」ではありません。くいやしいかくいやしくないかですね」

「職業に貴賤はないと思うけど、生き方には貴賤がありますねエ」

永六輔氏の著書『職人』（岩波書店）の中の一節である。今日の世相を考えると、実に意味深長な含蓄が含まれていると感じるのは、筆者でけだろうか。これは、何も職位の高さや役人風をふかず話だけにとどまらない。

若者の多くは、エアコンの良く効いた明るい個室でワークステーションのキーボードを叩くような技術者像を理想にしているように感じられる。彼らがイメージする技術者とは、手が油まみれになるような実験とは違うようだ。

たしかに、インターネットを駆使して、世界中の大学や研究機関のデータベースから情報を引き出すことも、今日の研究には欠かせないが、それは情報整理の手法にしか過ぎず、知識を創造するという技術者本来の任務の本質ではない。

ある分野で一芸に秀でることのすばらしさや、新しい知見を得たときのワクワクするような胸のトキメキと充実感、今も昔も変わらぬ人間最高の知的な悦楽だと思う。それこそが創造的発見の喜びである。

マズローの欲求5段階説によれば、欲求の最高位に位置するのは自己実現の完成であるが、自分の人生のすべてを賭ける価値のある対象を見出せないことは、人間一生の不幸といわねばならないだろう。

大学教育の役割の一つは、モラトリアム（執行猶予）型人間の若者にどのようにして、明確な自己目的意識をもった品性ある人格形成をさせるかにあると痛感している。

そして、若者たちが誇りを持って技術者を目指せるような環境をつくらなければならない。これは、筆者にかぎらず先輩技術者たちの義務だろう。

ふとしたことでよみがえった龍江義孝さんの思い出をかみしめるうちに、その感をいっそう強くした。機械技術研究所はこの4月より、独立法人産業技術総合研究所に統合され新たな体制で再スタートした。IT時代に相応しい21世紀の姿に変身しようとしている。機械だ。電気だ。と区分する時代ではないが、今後の飛躍をねがうこと切である。

先輩技術者、横川和彦先生のこと

筆者の周囲にも、友人、知人たちとの悲しい別れが増えてきた。世の定めとはいいながら、まことに寂しいかぎりである。そして、惜しまれる人物がたくさんいることから、残念という思いも強い。

筆者のいう「惜しまれる人物」とは、まだまだ身体的にも能力的にも活躍される力を持ち、周囲

に強烈な印象と大きな影響力を与えていた人々を意味している。彼らは、いずれも世の中を少しでも明るく豊かにし、それぞれの活動してきた専門分野の世界で、まだまだ大きな貢献ができるはずだった。そうした人々が、ある日忽然と冥界へと旅だってしまうのである。

筆者にとってのそうした人々の一人が、前回にご紹介した龍江義孝さんであり、そして、今回取り上げる、お酒好き先輩技術者で、明治大学名誉教授であった横川和彦先生である。横川先生は筆者にとっては大学の先輩であり、競合企業の強力なライバルであり、よきアドバイザーであった。その突然の訃報に接したのは、今年3月の春分の日であった。

先生のご専門は、工作機械の研削盤と研削加工技術である。先生の研究上の功績は数限りないが、わが国のCBN系砥石による加工技術開発の先駆者の1人として知られている通り、何とんでもCBN加工技術に代表される超砥粒関連の加工技術開発は特筆すべき成果であった。CBNとは、ダイヤモンドに次いで硬い人工結晶体である立方晶系窒化硼素である。CBN系砥石を使った加工の生産性は加工対象にもよるが従来の100倍から1000倍以上ともいわれる画期的なものであり、今日では自動車のカム・シャフトやクランク・シャフト加工には不可欠な技術となっている。

今では、CBN加工技術は常識になってしまった感はないが、この新しい技術の啓蒙・普及促進に産業界に果たされた先生の役割はきわめて大きいものがある。さらに、環境問題の深刻化に伴って、先生の提唱された冷風研削加工法やクーラントレス精密研削などの重要性が認識され、今後展開が期待される環境馴化加工技術の確立に向けて、まだまだ先生の力を借りて解決せねばならないことが山積している。

このような縁の下の目立たぬ役割を担うこと

の重要性は、今も昔も変わらないと思うのだがいかがであろう。その意味では、先生は研究者である以前に1人の技術者・技能者、職人であったと思うのである。

横川先生は工作機械企業の日平産業から三井精機に移られた多彩な経験をもつ技術者出身である関係から、工作機械業界の内部事情を誰より熟知されており、バブル崩壊後の10年間に失われた日本の製造業の威信、とりわけ国際競争力復権のための基盤となる「モノづくり」には傾聴すべき一家言をおもちであった。今となつては、そのベランメエの一家言もうかがえなくなつてしまったのは、じつに寂しいかぎりである。享年74歳。まだまだ活躍できる年齢である。先生自身も多分、やる気満々でおられたことと思うと、まことに慙愧の念に耐えない。

「和して同ぜず」の矜持が求められている

人は、それぞれに自分史を心の奥深くに秘めている。自分では波乱万丈の生き方をしてきたと自負はしてみても、他人から見ればさしたる特徴もない月並み平凡な市井の生活を送ってきたにすぎないという人は、筆者も含め数多いはずだ。自分史などといったところで、どこにでも転がっている退屈話の域を出ないというのが常である。

山田風太郎の『人間臨終図巻』（徳間書店、1986年刊）は筆者の愛読書の1つだが、短いエピソードと、それぞれの時代に生きた人々の臨終模様を描いた誠に特異な作品で、10代で夭逝した人たちから、100歳をこえる長寿をまっとうした人たちまで、歴史上の人物計923名の臨終をとりあげている。

寝つかれない夜、ウキスキー（できれば、スコットランドのスペイサイド産のピュアモルト。もちろん、水割りなどは論外中の論外であることはなうまでもない）をなめながら、同書をひもとき、

非凡な人々の自分史に思いをはせる。歴史上の人物がこんな数奇な運命をたどり、自分の年代にはどのような人生を送り、臨終を迎えたのか。さまざまなエピソードを拾い読みしつつ、いつしか寝入ってしまうことがよくある。

横川先生の自分史がどのようなものであったか、残念ながら生前の先生に直接、お伺いする機会はなかったが、その豪放磊落な性格と言動と相まって土佐ッポ特有の鼻柱の強さと、強烈な野次馬精神、野党精神は学会や業界でも有名であった。野党的言動といっても、どこかの国の政治家のように、その場かぎりの言辞で大衆に媚を売り、機を見るに敏な無責任の徒では決してない。このような性格から敵も多い方であったが、一方では熱烈な横川ファンも多かったように思う。かく言う筆者もその一人であった。

先生の魅力を一言で言えば、純粹性と利他の精神と言えるかと思う。

最近の政治風潮を映してかどうかは知らないが、馴れ合い談合の弊害が至るところに見受けられる。「同じて和ぜず」の虚飾性が世間一般に閉塞感をもたせるも当たり前だ。この世界からは、革新や改革など生まれるはずはない。「和して同ぜず」の矜持が求められるところである。

百聞は一見に如かず、百見は一考に如かず、百考は一行に如かず

横川先生は、研究においては無論のこと、明治大学における学生諸君の指導にもヨコガワイズムを遺憾なく発揮されていた。それは、今風に言えば、現地、現物、現象を重視する3現主義思想である。

「ヨコガワイズム」とは、「百聞は一見に如かず、百見は一考に如かず、百考は一行に如かず」の箴言の意味するものに近いと解釈できると思

う。つまり、自己の信念に基づき、勇気を以って行動を実践することこそが、事象や事物に対応するもっとも重要な態度だと言うことだ。「モノ作り」の基本は現地、現物を重視する実証主義が基本だとする行動指針とする主張である。「単なる口舌の徒になるなかれ」と、先生はことあるごとに訴えておられた。

たとえば、かつて先生は卒業研究の一環として学生達と一緒に手作り NC 工作機械を手がけられたことがあった。正に先生の真骨頂と言うべきだろう。すべて手作りの NC ジグ研削盤を学生とともに1年がかりで作り上げ、卒業研究としたとうかがっている。

もちろん、図面を最初からひいて、すべてを新作した訳ではないが、中古で大学に放置された旧型工作機械を分解し、最低限必要な鋳物部品を新作し、モーターや電子機器を新装し、お化粧直した代物だが、学生が手を汚して得た貴重な経験は、「モノ作り」についての第1級の教育そのものであるとあってよい。

先生の研究の特徴は、前述したように徹底した実験、観察を重視したところにあったと思う。軽薄なシミレーション万能のお手軽な Exercise 的研究が数多く見受けられる今日、先生の現実重視の研究姿勢こそが、情報時代のコンテンツ創造の源泉として、今こそ求められているのである。

世にブック・エンジニアが蔓延し、真の職人魂をもつ技術者が、段々と稀な存在にならんとする現在の風潮は誠に嘆かわしいが、それは技術者が段々と陽明学でいうところの良知を喪失してきたからであろうか？

陽明学では心の靈明で感応に誤りのないものを良知とし、良知は私欲で曇り、その障害を取り除き、知行合一を計らねばならぬと教えている。心の靈明は聖人でも凡人でも、元来は等しく具有しているとしている。

形而上学的なこのような単純・明快な議論は、現在の複雑きわまりない世界では通用しないだろうが、人は元来は単純・明快地に生きるのが一番幸せなのではないかということも含意していると思う。

先生は誠実な人柄に秘めた自己の哲学に対する凜とした気迫と気概をもっておられた。と同時に、なによりも人間臭の横溢した存在でもあった。筆者などは大学の後輩ということもあり、お酒好きの先生には若い時分から、すせいぶんと可愛がっていただいた。

そのせいも多分にあったのだろう。晩年は重い糖尿病を患われ、人工透析の苦難な日々を過ごされたと聞いているが、そんな様子は微塵も見せず、研削加工や工作機械に対する燃えるような情熱と技術に対する矜持と志とは亡くなりになるまで、変わることはなかった。

それは、「モノづくり」に対する自信に満ちた横川哲学といってもよいだろう。

なぜか、横川先生の面影と二重映しに、かつて日本の製造業界を闊歩していた、野武士のごときたくましい技術者の群像が筆者の脳裏を駆けめぐるのである。(2001/4/25) (2001/5/16)